

第一篇 自然環境

第一章 地誌

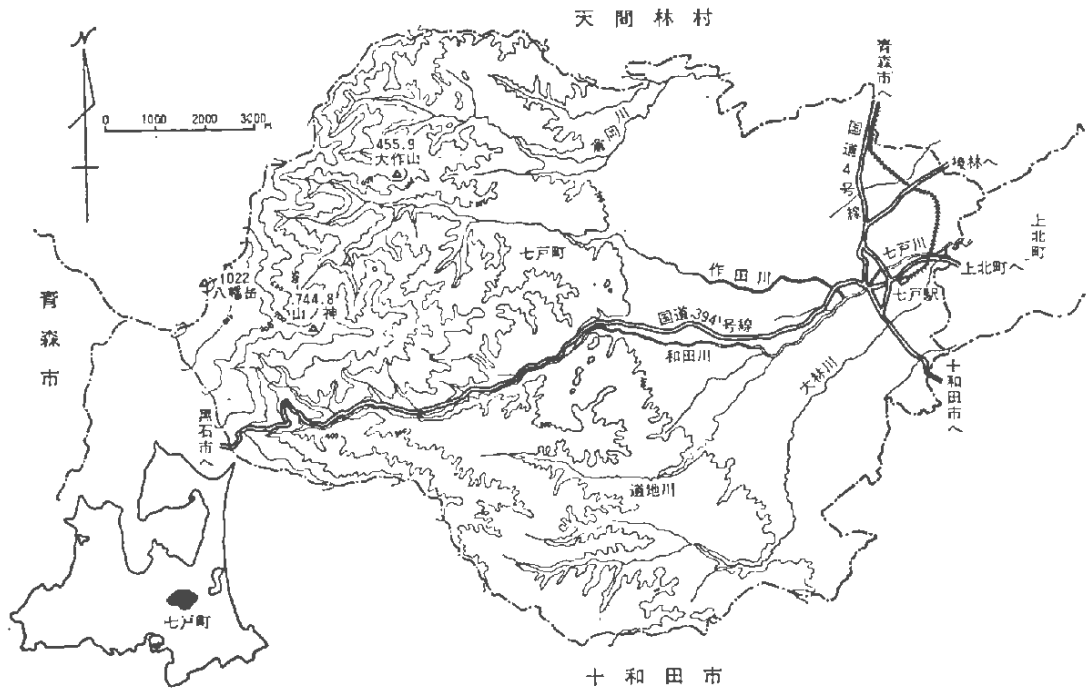
第一節 位置・面積

青森県の中央を奥羽山脈が南北に貫いており、その東には丘陵地がはるか太平洋にまで広がっている。すなわち、八甲田山系と三本木原台地である。

一般に県南地方と呼ばれるのは、南は岩手県境から、北は下北半島基部までの太平洋に面したこの地域である。

七戸町は、この県南地方の西縁、八甲田山系と三本木原台地の境界のほぼ中央に位置する。

東端は東経一四一度一分二三秒、西端は東経一四〇度五九分三八秒、南端は北緯四〇度三七分四九秒、北端は北緯四〇度四四分三七秒の各経線・緯線に囲まれている。その形状は、東西の方向性を持ち、多少膨らんだ紡



第1図 七戸町の位置と地形

錘形をしており、その面積は、およそ一三六平方キロメートルに及んでいる。

紡錘形の西端から南側をめぐって東端近くまでは十和田市と接し、さらにそこから東端までは上北町と接している。また、西端から北側をめぐって東端までは天間林村と接している。そして、西端においては、境は接していないというものの、すぐ西の青森市とはごく近い位置関係にある。

交通面では、国道4号線が町の東端の市街地を南北に走り、北は青森市へ、南は十和田市を経て盛岡・東京方面へ通じている。また、国道394号線が、町のほぼ中央を横断して西へ伸び、八甲田山系を越えて黒石市とを結んでいる。

さらにこれらの国道から分岐して、七戸・沼崎（上北町）停車場線、三沢・七戸線、七戸・榎林・平沼線、七戸・十和田湖町線などの県道が隣接市町村にのびている。

その他、昭和三七年（一九六二）に営業を開始している私鉄の南部縦貫鉄道がある。

南部縦貫鉄道は、町の東端の七戸駅から東北本線野辺地駅まで、国道4号線とほぼ平行して南北に走っている。

全般的にみて、七戸町は八甲田山系を西にひかえているために、こじんまりながらも非常に落ち着いた、美しい自然に恵まれた環境にあるといえる。そして、東北新幹線の駅舎が七戸町に決定している事から、県南地域の交通上の重要性も注目されつつある。

第二節 地 勢

七戸町の西半分は八甲田山系の山地で、東半分は三本木原台地である。七戸町の山地の西端は八幡岳（標高1〇二二メートル）で、その山頂には嶽八幡宮の御堂があり、古くから信仰の対象になっている。

また、近年は道路が整備され、山頂まで自動車で行く事も可能になり、はるかに太平洋を望む景色も気軽に楽しめる、より身近な山へと変わりつつある。

八幡岳より東には、大作山（標高四五六メートル）などの山々が漸次低くなりながら続き、山林や牛の放牧などに利用されたり、あるいはスキー場が設置されたりしている。

三本木原台地はいくつかの段丘によって特徴づけられている。すなわち、高位段丘の天狗岱段丘・中位段丘の高館段丘・低位段丘の三本木段丘群である。

このうち七戸町の丘陵地は、低位段丘の三本木段丘群である。この三本木段丘群は、標高が八〇メートルから四〇メートルで、西に高く東に低くなる傾向がある。

低位段丘の意味するところは、その土地が高位段丘や中位段丘よりも新しい時代まで水底にあったことであり、七戸町の段丘面が、それより東の海寄りにある三沢市や上北町の段丘面よりも、後で形成されたことは意外な感じを受ける。

この台地はいずれも八幡岳に源を発し東流するところの、倉岡川・作田川・和田川・道地川・大林川などの河川によって開析されている。

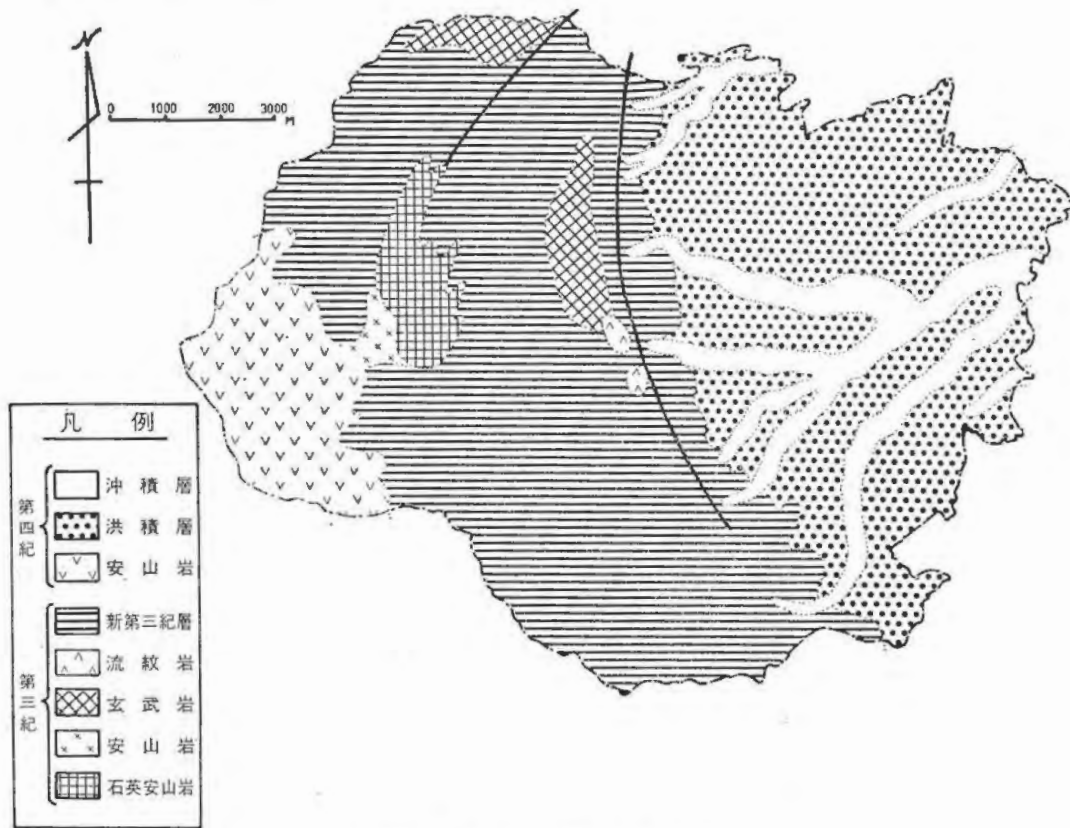
そして、これらの河川は市街地やそれ以东で合流して、七戸川となって小川原湖に注いでいる。

作田川と和田川は市街地で合流するが、この合流点近くの開析された台地が舌状にのびた所が城跡で、これを取りまくように発達したのが七戸町である。近年は多くの町の施設や住宅などが台地の上に建てられるようになり、いわゆる城下町としての形状を変えつつある。

台地の多くを国営の奥羽種畜牧場が占め、残りの土地が私設の牧場や畑地として利用されている。

第三節 地 質

七戸町の地形はおおまかにみて、西半分の山地と東半分の台地とに分けられるが、地質においても、西半分と



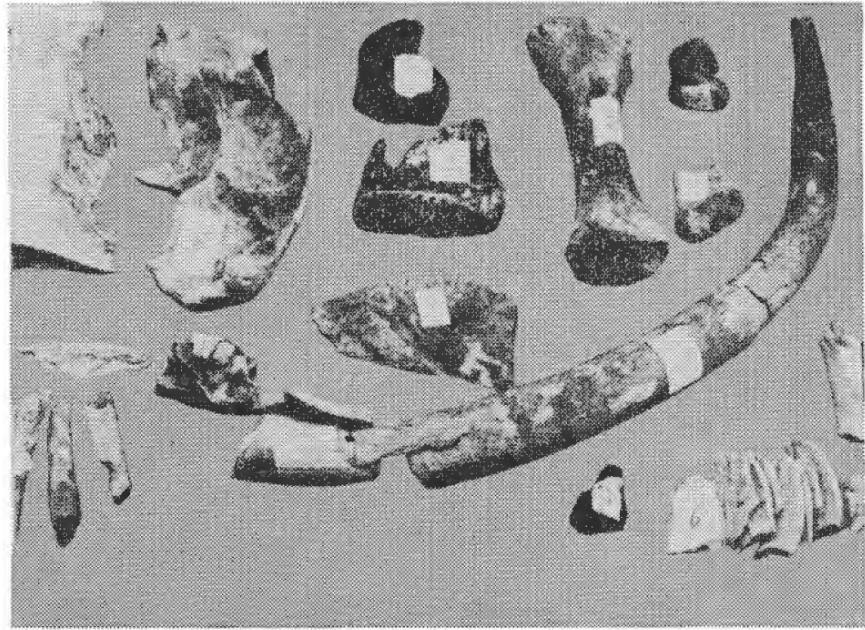
第2図 地 質 概 略

東半分に分けられる。

西半分の山地は、今から二五〇〇万年前から二〇〇万年前までの新第三系（中新世・鮮新世）で構成され、東半分の台地は、二〇〇万年前以降の第四系（更新世・完新世）によって構成される。但し、山地においても、西端の八幡岳周辺の安山岩は八甲田火山の活動と一連のものであり、第四紀の活動によるものである。

西半分の山地の新第三系は、おおまかにみて、作田川上流の大作山を中心としたドーム構造を形作るとみなせる。つまり、七戸町において一番古い地層が大作山の周辺であり、東には東傾きで、南には南傾きで漸次新しい地層がこれを取りまくような構造にある。

岩相は、安山岩・凝灰岩・砂岩・泥岩・頁岩などで、各種貝化石や有孔虫化石・海綿化石・植物化石を産する。これらの新第三紀層は、山地の縁にある南北



アオモリゾウの化石

方向の断層で断ち切られ、それより東には第四紀層がほぼ水平に分布している。第四紀の洪積層は、野辺地層と三本木層に分けられているが、野辺地層はより古いため下部にあり、七戸川などの河底に認められるにすぎない。

しかし、天神林の七戸川の河岸の野辺地層から、アオモリゾウ（七戸ゾウ）と名付けられた小型のゾウの一個体分の化石を産している。

七戸町には坂が多く崖もよく目につく。この崖をよく見てみると大小の浮石（軽石）を多量に含んだ地層である事に気付く、これが三本木層である。

七戸町の台地は、構造的には水平なこれらの洪積層により構成されている。そして、三本木層の上には火山灰層を載せるが、前述したように七戸町の段丘は低位段丘であるため、その火山灰層は、上

北町や東北町のそれよりは大変に薄い。
沖積層は、洪積台地を開析する大小の河川に添って細長く分布する。また、台地の表土は火山灰腐植土である。

第四節 河 川

七戸町の河川は北より、倉岡川・作田川・和田川・道地川・大林川などがある。いずれもその源を町の西端の八幡岳に発し、東流して市街地や、さらに東の上北町において合流し、七戸川として小川原湖に注いでいる。山地においては深くこれを刻み、V字谷や作田川上流の三階滝などの景観を作り、流れ下っては東の台地を開析し、河岸段丘を形成する。

そして、これらの河川は細長く沖積層を堆積させ、そこに狭いといえ水田が分布している。

上北土地改良事務所の七戸川の笹田付近における流量観測によると、増水がみられるのは、三月末から五月初めにかけての比較的長期にわたるものと、九月・一〇月の突発的で短期のものがある。

三月末から五月初めにかけての増水は雪解けによるもので、例年その量とか期間はほぼ一定している。これに對して九月・一〇月の増水は、台風や秋雨の雨の影響によるもので、期間は短かくその年により多少の変化がみられ、急激な増水の特徴とする。

最高水位を示すのは、春の増水時の年もあるが、秋の増水時には桁ちがいの増水を見られる事もあり、近年、作田川や和田川にダムが建設され、河川の治水も整備されているが、注意が必要である。また、減水がみられるのは、一月から二月にかけての冬季と、七月から八月にかけての夏季の二回である。最低水

位を示すのは、毎年七、八月の夏季である。

第五節 温 泉

最近、上北町や東北町・天間林村などの各地に温泉が掘られているが、七戸町にも二つ掘られている。一つは笹山の「あすなる温泉」であり、一つは立野頭の「立野頭温泉」である。

いずれも約一〇〇〇メートルのボーリングによって得られたもので、動力揚湯されている。その性質はほぼ同じで、泉温は摂氏四七度前後の微褐色で無味無臭の単純泉である。

適応症としては、リウマチ性疾患・運動器障害・神経麻痺・神経症・病後回復期・疲労回復などがあげられている。「立野頭温泉」は、老人福祉センターの施設として掘られたものであるが、「あすなる温泉」は広く一般に利用されている。

第二章 気 象

第一節 気 象 概 説

七戸町の気象の特徴としては、他の県南地域と同様に、冬は風が冷たいが雪が比較的少ない事と、しばしば冷害をもたらす初夏の冷たく湿った東風、いわゆるヤマセとが挙げられる。

四季を追ってその概要をみると、例年一メートル前後の積雪が融け終るのは、三月の末から四月の始めにかけてである。この時期には、台風並みの低気圧が本県を西から東へ通り抜ける事があり、早春のため農作物への影響はほとんどないが、その突風のため、人家や交通機関への影響は大きい。

四月末から五月にかけては穏やかな晴天の日が続き、一年中で最も乾燥した時期にあるため、火災には充分注意しなければならない。また桜の開花がみられるのもこの時期で、四月末から五月初めのゴールデンウィークに重なることもあって、県下でも桜の名所として知られる奥羽種畜牧場は、多くの人出で賑う。

さらに、この時期には晩霜もみられるが、農作業はビニールハウスによる苗作りの時期で、農作物への影響は比較的少ない。

毎年六月の一〇日前後には梅雨に入り、一変して肌寒く、ぐずついた天気が七月中旬の梅雨明けまで続く。この時期には、日本付近は長期間にわたり気圧の谷に入り、この低圧部に北海道北東のオホーツク高気圧から、冷たく湿ったヤマセと呼ばれる東風が吹きつけるため起るもので、このため農作物、特にこの時期に出穂する稲への影響が大きく、開花期に冷たい長雨が続き日照時間が極端に少ないと不稔障害が起り冷害となる。

このヤマセは、太平洋側から吹きつけ八甲田山系で遮ぎられるため、津軽地方には及ばず、県南地方特有のも

のである。

ちなみに、明治三五年以来の大冷害といわれる昭和五五年の場合についてみると、四月・五月の平均気温はむしろ平年より一、二度高く、日照時間も近年になく多いものであった。ところが、この状態も六月八日の梅雨入りとともに一転して冷夏と変わり、七月・八月とも平均気温はそれぞれ摂氏一九・〇度、一九・三度といずれも二〇度を割っている。（平年の平均気温は、七月は摂氏二二・三度、八月は二三・七度）

そして、例年は七月下旬から八月上旬にかけて最高気温を記録するが、この年は梅雨入りの前日の六月七日に最高気温の摂氏三二・三度を記録している。

日照時間も極端に少なく、七月・八月のそれぞれの日照時間は四四・二時間、五八・五時間であった。（平年の平均日照時間は、七月は一三一・四時間、八月は一二七・〇時間）

例年は七月中旬に明ける梅雨もこの年は遅く、梅雨明け宣言がされたのは八月三日であった。このため、県南地方の稲は皆無作となってしまう。このように、ヤマセの農作物への影響はすさまじいものがある。

さて、七月下旬から八月中旬にかけては短いながら夏らしい天気が続き、お盆過ぎの八月中旬には秋風が吹き始める。

八月末から九月にかけては、大陸からの移動性の高気圧が周期的に日本を通過するため、青森県でも天気が周期的に変わる。いくつかの台風も毎年この時期に集中する。青森県に台風が近づく頃には大分勢力が落ちていくというものの、特に水害を主に毎年被害を受けており、決して侮れない。

一〇月に入ると、高田大岳・八幡岳に初冠雪がみられるようになり、平地でも初霜が降り、一気に寒さを増してくる。霜はいわゆる放射冷却が起ると発生しやすく、よく晴れた日の翌朝に降りる事がしばしばで、特に冷気の流れ下る沢沿いの畑地ではその対策に苦慮している。

一月には平地でも初雪がみられるようになり、一二月末から寒さの厳しくなる翌年の一月にかけて根雪となり、二月に一番多くの降雪がみられ、三月末にかけて一メートル内外の積雪となる。

このように、非常に変化に富み、また厳しい自然環境が、七戸町を始めとしてこの地域の気候の特色といえる。次に、奥羽種畜牧場での昭和四七年から昭和五六年までの一〇年間の気象観測の資料によって、気象各要素についてふれる。

第二節 気 温

気温の月別平均気温で高位は八月で、低位は一月である。低位は一月であるが平均最低気温は二月が低く、最低極値も二月に記録しているし、感覚的にも二月は寒い感じが普通である。つまり、二月は気温の変動が大きい事を意味する。

三月からは徐々に気温が上昇し、八月に最高となり、最高極値も八月に記録する事が多い。そして、九月からは急速に気温が下っていく。

第1表 気象統計表

(昭和47年～昭和56年)

事項 \ 月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	平均 極 値
平均気温(℃)	(-)1.4	(-)1.1	2.8	9.5	15.2	18.3	22.3	23.7	19.9	14.4	6.9	1.3	11.0(平均)
平 最高 均 気温(℃)	2.0	2.4	5.9	13.6	19.1	21.8	25.9	26.8	22.9	18.1	10.6	4.6	14.5(平均)
最高極値(℃) 起日年月日	11.7 54・1・10	13.7 54・2・21	19.7 47・3・29	23.0 50・4・30	29.7 49・5・18	32.2 55・6・7	35.0 53・7・24	35.8 50・8・1	32.0 49・9・3	27.3 53・10・2	21.0 48・11・10	15.7 53・12・14	35.8(極値) 50・8・1
平 最低 均 気温(℃)	(-)6.2	(-)6.9	(-)4.1	1.3	6.3	12.1	16.3	17.7	13.0	6.5	0.7	(-)3.6	5.3(平均)
最低極値(℃) 起日年月日	(-)18.0 53・1・30	(-)20.8 53・2・17	(-)15.7 52・3・7	(-)6.8 51・4・2	(-)2.0 55・5・8	2.7 56・6・4	4.1 51・7・1	8.7 51・8・27	2.5 49・9・24	(-)2.8 50・10・31	(-)7.0 56・11・26	(-)15.2 51・12・30	(-)20.8(極値) 53・2・17
平均降水量(mm)	112.7	82.3	75.4	66.7	76.6	131.9	122.4	193.4	190.4	93.4	126.3	99.8	114.3(平均)
最大日降水量(mm) 起日年月日	59.7 47・1・16	46.0 50・2・5	48.0 47・3・31	59.0 56・4・20	56.0 53・5・30	62.5 55・6・17	59.5 55・7・3	106.6 56・8・22	118.0 49・9・10	81.5 54・10・19	105.0 52・11・17	50.0 52・12・9	118.0(極値) 49・9・10
湿 度(%)	73.1	73.8	67.0	63.0	66.2	80.4	81.7	78.9	77.0	72.1	76.0	77.5	73.9(平均)
最 多 風 向	W	W	W	W	E	E	E	E・SE	W	W	W	W	

注：平均気温とは午前9時の観測値である。

資料：農林水産省奥羽種畜牧場

昭和四七年から昭和五六年までの一〇年間の平均最高気温は、摂氏一四・五度。平均最低気温は、摂氏五・三度で、最高極値は昭和五〇年八月一日に摂氏三五・八度を示し、最低極値は昭和五三年二月一七日に、氷点下摂氏二〇・八度を記録している。

平均気温は摂氏一一・〇度である。この平均気温は午前九時の測定値であるため、他の地域との比較はいちがいにできないが、県内各地との大きな差はみられない。

第三節 降水量および湿度

降水量の月別最高値を示すのは八月と九月で、これは、この時期に台風が襲来するため、月別平均それぞれ一九三・四ミリメートル、一九〇・四ミリメートルと極端に大きな値を示す。

最大日降水量は、昭和四九年九月一〇日の一一八・〇ミリメートルである。これは、この年の台風18号の影響によるものである。

これとは逆に最低値を示すのは、四月の平均降水量の六六・七ミリメートルである。これと関連して四月の湿度は低く、その平均は六三・〇パーセントを示し、これを挟んで三月と五月も低い値を示す。

最低平均降水量と湿度の低い値は相関を示すが、最高平均降水量と湿度の高い値との相関はみられない。すなわち、最高平均降水量を記録するのは、八月と九月であるが、これは集中豪雨の形を取るためであり、湿度の高

い数値を示すのは梅雨時の六月と七月で、それぞれの値は、八〇・四パーセントと八一・七パーセントである。平均降水量は、一一四・三ミリメートルで、県内各地域と比べて特に多くもなく少なくもない。なお、第一章の第四節河川に記した降水量と河川流量との関係で、注意を必要とすることは、その節を再読願いたい。

第四節 風向・風速

風向を年間を通じてみると、一月から四月までは西風が卓越し、五月から八月までは東風が卓越し、九月から一二月までは再び西風が卓越する。

一月・二月の西風は冷たく厳しいもので、台地の上では強く吹くと地面の雪が巻き上げられて地吹雪が発生し、交通の大きな障害となる。

三月から五月にかけては、比較的乾燥した風が吹き、特に季節の変り目となる三月末から四月にかけて、突風が吹き荒れる事がよくある。

五月末から八月にかけては東風が卓越するようになり、冷たく湿ったヤマセが吹き続けると農作物への影響が大である事は前述した通りである。

八月末からは風も冷たくなり、一二月までは再び寒冷的な西風が卓越するようになる。

第二章 気 象

第2表 月別平均降雪・積雪量

(昭和47年～昭和56年)

事項	月	1	2	3	4	……	11	12
平均降雪(cm)		5.2	4.6	2.0	0.04		0.9	3.2
平均積雪(cm)		36.1	62.8	42.3	2.6		1.4	10.5

資料：農林水産省奥羽種畜牧場

註：昭和46年5月7日降雪で温床被害の声を聞く。

最大降雪 47.0cm 起日年月日 昭和56年2月24日

最大積雪 135.0cm 起日年月日 昭和56年2月28日

第3表 初霜・晩霜
(昭和47年～昭和56年)

事項	初霜月日	晩霜月日
昭和47年	10月18日	5月11日
48	10月9日	5月24日
49	10月16日	4月13日
50	10月17日	4月24日
51	10月7日	5月9日
52	10月3日	5月9日
53	10月8日	5月16日
54	10月21日	5月5日
55	10月16日	5月19日
56	10月13日	5月21日

資料：農林水産省奥羽種畜牧場

第五節 降積雪・降霜

県南地方は比較的雪の少ない地域ではあるが、七戸町はより山地寄りであるために、当地方においては、多少降積雪が多めである。

昭和四七年から昭和五六年までの一〇年間で、最大降雪を記録したのは、昭和五六年二月二四日の四七・〇センチメートルで、最大積雪を記録したのは、同じ

く昭和五六年の二月二八日の一三五・〇センチメートルである。

降霜は第三表に示したごとく、初霜は一〇月初旬にみられ、晩霜は四月下旬から五月上旬に多くみられる。

第三章 生物

第一節 概 要

この地域は、日本の植物生態分布上の位置から見ると、落葉広葉樹林帯のミズナラープナ域に属している。

このミズナラープナクラスの発達している領域は、月平均気温摂氏一〇度以上の月が四〜六カ月続くところで、このようなところは北海道南西部・東北一帯・中部地方と九州の山地及び屋久島の山頂部にわたっており、日本列島の中心部にあたるところである。これらの地方、山地に代表的な夏緑広葉樹の原生林がブナ群落で先史時代（農耕文化・製鉄文化の発達以前）と、上北地方では歴史時代の平安期以降馬の本格的な放牧以前には、ほとんどこの群落でこれらの地方がおおわれていたといわれる。即ち、人類の手によって有史前後すでに何度かに及ぶ大きな自然破壊がおこなわれ、今日では更に切りひらかれて多くの人が住みついたために、この原生林の領域がかなりせばめられている。とくに平野部においては、その破壊の後にスギ・アカマツ等の人工植栽が進めら

れるに及んで原植生の面影は全く認められないといつてもよいだろう。

この失われつつあるブナ群落のなかには、ミズナラ・カシワ・ヤマハンノキ・ヤナギ・トチノキ・シラカバナなどを優占種とする群落が見られる。ミズナラ―ブナクラスの中には、一部であるが針葉樹を主とする群落も含まれている。即ち、ヒノキ・サワラ・コウヤマキ・アスナロ・ヒバ（ヒノキアスナロ）などをそれぞれ優占種とするものである。以上は主として高木林であるが、なかにはノリウツギ・ミヤマナラなどの夏緑広葉の低木も見られる。これらがミズナラ―ブナクラスを構成する群落であるが、それぞれの地方・山地によりまたは、山の尾根とか谷間・河辺などの地形などの影響によりたがいな \wedge すみわけ \vee をしたりさまざまな植生配分・発達の状態を示している。

さて、今までミズナラ―ブナクラス域の一般的植生について概要を述べたが、当地方七戸町の現況を次に見てみたい。

七戸町の植生概要は次のように区分できる。

一 八幡岳中腹から頂上までの地域

七戸町に認められる唯一の原生林で、ミズナラ―ブナクラスの中のブナ―オオバクロモジによって代表される典型的な八甲田東部の植生と共通しているが、頂上付近の緩傾斜地は二五〇ヘクタールに及ぶ草地造成がおこなわれて放牧地となっている。

二 八幡岳山麓地域

標高三〇〇メートル以下と二〇〇メートルの地域で、ミズナラーコナラークリ群落の二次林におおわれている。この上部のブナ―オオバクロモジ群集の代償植生と思われるが、地域の一部和田川上流には、スギ・カラマツの人工植栽林が認められる。

三 ローム地帯と沖積低地帯地域

標高二〇〇メートル以下の丘陵地帯と和田川・作田川・倉岡川等の流域に、農耕地・草地が広く分布し、その一部洪積台地に、スギ・アカマツ・カラマツの植林地がモザイク状に認められる典型的人里植物地帯である。この地域で特徴的なのは、社寺・城跡周辺を中心に、スギ・モミ・イチヨウ・ケヤキ等の古木が見られ、人類文化の浸透の古さが伺われて興味深い。

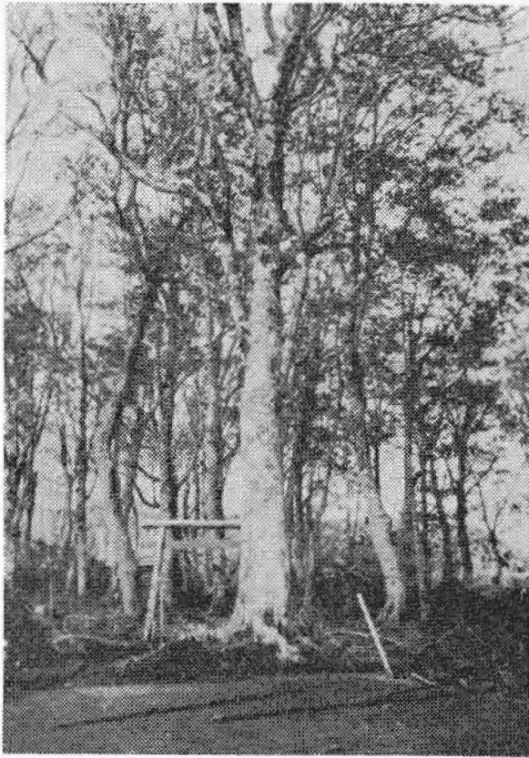
一方、動物はその地域の植生基盤の中で生息しているので、八幡岳を中心とした原生林には、大型哺乳類のニホンカモシカ・ホンドギツネなどやホンドイタチ・ホンドテン・ニホンアナグマ・ニッコウムササビ・トウホクノウサギ・ヤマネ・ニホンリス等の森林性中小哺乳類から山地性の昆虫が生息し、動物相は東八甲田との共通種が多い。また、平野部の人里植物地域では、十和田市や天間林村及び上北地方で一般に見られる種に限られており、とくに哺乳類相は貧弱である。

第二節 植 物

七戸町は、植生上からは概要の節で述べたように、ミズナラ—ブナ域の冷温帯の落葉広葉樹林帯に相当し、ブナを優占種とする地域であるが、その本来の植生は八幡岳（一〇二二メートル）の中腹以上の山地帯で認められるほかは、薪炭等に供するための伐採か山火事等で破壊された跡に代償植生として発達した遷移途中のミズナラ—コナラ—クリで代表される二次林が、中腹以下の山麓一帯に広く分布している。いわゆる、この代償植生区域は、先の八幡岳中腹以上の原生林に次いで自然度の高い区域である。この下部の丘陵地帯が市街地へ続き、農耕地を取囲むように人工林のスギを主体とした山林が、モザイク状に分布している。この区域の林床にはしばしば、本来自然度の高いブナ林下で群生するキクザキイチリンソウやエンレイソウ属の各種、或は和田川等の沖積低地帯には泥炭地植物（寒冷地系）のエゾリンドウやミツガシワなどが散見される。また、これら在来種の中に侵入している帰化植物のオオハンゴンソウなども見られ、植物社会が混乱している区域である。以上述べたように、三区域は植生上それぞれ特徴をもっているので、これに基づいて三区域々に記述する。

一 八幡岳中腹から山頂までの植生（標高四〇〇メートル以上の原生林地帯）

八幡岳は七戸町の中心部から西へ約一〇キロメートルに位置し、標高一〇二二メートルの緩傾斜地の多いなだ

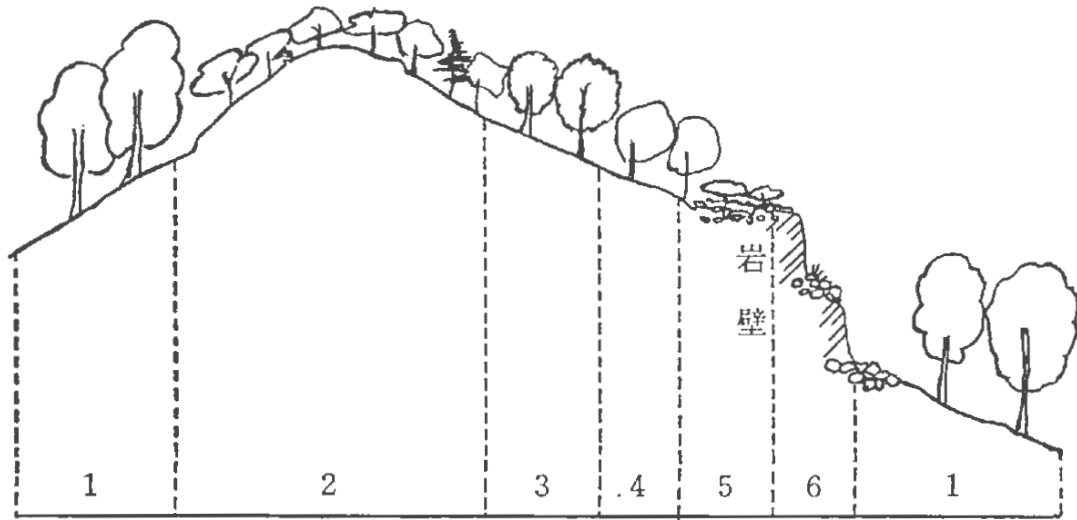


八幡岳山の神付近のブナ林

らかな山である。古くから近在の人々によって山岳崇拝の対象になり、現在は、平坦部の多い山のため中腹の二五〇ヘクタールほどが放牧地として利用されている。山腹（四〇〇メートル）から山の神（九五〇メートル）に至る緩傾斜地の大部分は、ブナーミズナラ域の一型であるブナーオオバクロモジ群集が極相林として発達している。この群集の高木層はブナで、低木・草本層はチシマザサ（ネマガリダケ）が優占し、典型的な裏日本型ブナ林を構成している。この林床にはツマ楊枝に利用されるオオバクロモジのほか、ヒメアオキ（アオキの裏日本型）・ウワミズザクラ・ミネカエデ・タケシマラン等が部分的に出現し、ブナ林を特徴づけている。また、これらのように頻繁に出現しないが、沢沿いの湿潤地で高木層に、サワグルミ・トチを混入するジュウモンジシダ・ウリノキ・リョウメンシダ・オンダ・オヒョウ・サワグルミ群集も見られる。この林床には、ジュウモンジシダ・ウリノキ・リョウメンシダ・オンダ・オヒョウ

・トチバニンジン・エゾアジサイ・ヤグルマソウ・ハナイ
 カダ・ミゾシダ・オオカモメヅル・サラシナシヨウマなど
 が随伴種として出現する。また、乾性地の貧栄養地には、
 春一番に紫紅色の美花をひらく、ムラサキヤシオツツジ・
 アクシバ・シンガシラ・ヤマウルシ・マルバマンサク・ツ
 バメオモト・ハクサンシャクナゲ等が林床を色どる。

一方、田代平に至る南側斜面の尾根すじの一部に湿性
 地があり、エゾアブラガヤ・オオバセンキュウ・オクトリカ



- 1 : ブナーオオバクロモジ群集
- 2 : ミヤマナラ群集
- 3 : ダケカンバ群落
- 4 : ミヤマハンノキ群落
- 5 : ミヤマヤナギーコメツツジ群落
- 6 : イワキンバイ群落

須藤 智道による

第3図 八幡岳山頂部植生配分模式図 (SE-NW)

ブト(有毒)・ハンゴンソウなどからなる高茎草本群落が発達している。

山頂部には、亜高山帯から高山帯にかけて分布する植生がいくつか認められる。強い風のため樹高二メートル弱のミヤマナラ群落が発達し、その後背部分には、ダケカンバ群落が隣接して分布している。

このミヤマナラ群落の表土が薄い尾根上の林分ではキタゴヨウ・イチイの古木を混生する。この林床には、ツバメオモト・ミヤマスマシレ・ヒメスギランが生育している。山頂の北西側崩壊地岩壁上には、ミヤマヤナギーコメツツジ群落が発達し、その後背部にはミヤマハンノキ群落をともなっている。また、崩壊地にはイワカガミ・ハナイカリが生育し、岩壁上には、ユキワリコザクラ・イワキンバイなどの高山草本群落が発達している。以下に、主な群落の構成種を多い順に列記して参考に供したい。

エゾアブラガヤ群落 (標高六四〇メートル)

エゾアブラガヤ・ミゾソバ・ミノボロスゲ・ヒメヘビイチゴ・ハンゴンソウ・ミズバシヨウ・ツボスミレ・エゾシロネ・アカバナ・ヒメジソ・オオバセンキュウ。

ミヤマナラ群落 (標高一〇一〇メートル)

ミヤマナラ・ナナカマド・ミネカエデ・キタゴヨウ・アオダモ・コメツツジ・イチイ・アカミノイヌツゲ・チシマザサ・ホツツジ・アキノキリンソウ・ノリウツギ・ウスノキ・ツルツゲ・ハクサンシヤクナゲ・ホソバノトウゲシバ・ミヤマスマイレ・トリアシシヨウマ・シシガシラ・マイヅルソウ。

ダケカンバ群落 (標高九八〇メートル)

ダケカンバ・ミヤマナラ・イチイ・アカミノイヌツゲ・ミヤマザクラ・ムラサキヤシオツツジ・ブナ・アズキナシ・チシマザサ・ホツツジ・ハナヒリノキ・ウスノキ・コヨウラクツツジ・マイヅルソウ・ホソバノトウゲシバ・ツルシキミ・ハクサンシヤクナゲ・ミネカエデ・タケシマラン・ウスバサイシン。

ミヤマハンノキ群落 (標高九六〇メートル)

ミヤマハンノキ・アオダモ・ミヤマナラ・ノリウツギ・マルバマンサク・チシマザサ・アキノキリンソウ・アキカラマツ・オオカメノキ・ヤマモミジ・ウスバサイシン・ツリバナ・ツルシキミ。

ミヤマヤナギ―コメツツジ群落 (標高九六〇メートル)

ミヤマヤナギ・コメツツジ・アオダモ・オトコヨモギ・イワカガミ・イブキボウフウ・イワキンバイ・アキノ



八幡岳中腹道路沿いのキタゴヨウ

キリンソウ・ハンショウヅル・アキカラマツ・ミヤマスマミレ・ベニバナイチヤクソウ。

イワキンバイ群落（標高九五〇メートル）

イワキンバイ・イブキボウフウ・コメツツジ・イワノガリヤス。

キタゴヨウ群落（標高約四〇〇メートル）

八幡岳の中腹標高四〇〇メートル付近のブナ林中に、作田川に合流する一支流があり、この溪谷に一〇メートルほどの落差をもった三段の滝がある。紅葉シーズン等は多数の行楽客が訪れるところで、三階滝と呼んで親しまれている滝である。この滝の両側で岩盤が露出しているところに、キタゴヨウが点々と分布している。特に珍しい植物とは言えないが、植物社会的に興味がもたれる植物である。このキタゴヨウ群落は、キタゴヨウ・ミズ

ナラ・ブナ・ハウチワカエデ・マルバマンサク・リョウブ
・ミネカエデ・コヨウラクツツジ・ナナカマド・アカミノ
イヌツゲ・ヤマウルシ・ハナヒリノキ・アズキナシ・タム
シバ・ヒメヤシヤブシ・ホツツジ・アクシバ・クロスゴ・
ミヤマホツツジ・シノブカグマ・カラスシキミ・ヤマソテ
ツ・ウリハダカエデ・イワナシ・イワノガリヤス・ヤマツ
ツジが構成種となっている。

二 八幡岳山麓の植生（標高四〇〇メートル～一〇〇メートル）

山麓一帯は、起伏に富んだ急傾斜の小山並みが奥羽種畜牧場の手前まで続き、その半分以上が、中腹から頂上付近にかけて見られるブナ・オオバクロモジ群集の代償植生と思われるミズナラ・コナラ・クリ群落におおわれている。また、和田川上流山館部落や作田川・倉岡川沿いに点在する左組や銀南木部落付近の山麓一帯は、スギを主にカラマツ・アカマツの植栽林が見られる。

これらの植生の中で、沢通りに発達するサワシバリ・ヨウブ群落が特徴的で、群落構成種には、トチノキ・スミレサイシン・ヤグルマソウ・ユキザサ・トチバニンジンなどがあり、高木層にはミズナラ・サワグルミ・エゾイタヤカエデが主に出現する。そのほかの主な種を列記すると次のようである。亜高木層として、シウリザクラ・ウリノキ・オヒヨウ・ヤマモミジ・ハウチワカエデ・キブシ・ホウノキ・ミズキ・サルナシ・シナノキ・オオヤマザクラ・ヒメヤシャブシ等の樹種が混入している。この林下には、ヤマグワ・サンショウ・ハイイヌガヤ・ヒメアオキ・オオバクロモジ・ニガキ・チシマザサ・コマユミ・ムラサキシキブ・マルバマンサク・ニワトコ・ツノハンバミなどの中小灌木類が見られる。草本類では、ヒトリシズカ・キバナイカリソウ・オオタチツボスミレ・ジュウモンジシダ・コタニワタリ・トリアシショウマ・サラシナショウマ・ミヤマカンسゲ・スミレサイシン・ハナイカダ・ミゾシダ・チゴユリ・ツリバナ・クジャクシダ・クルマバソウ・ツバメオモト・シラネアオイ・マイヅルソウなど、四季を通じて人目につく植物が頻繁に出現し、原生林内と異なつたうるおいのある美しい植物が多い。

そのほか、雪崩等の発生する不安定地形には、ヒメヤシャブシ・タニウツギなどの群落があり、構成木の基幹の大部分が斜面下方に下垂している。この群落には、キブシ・ヤマモミジなどの木本類とオオヨモギ・トリアシショウマ、山菜として楽しめるウワバミソウやエゾニュウ・アキノキリンソウ・ダイモンジソウ・イヌガンソクなどの草本類がある。また、この群落の林縁には、マント植物としてヤマブドウが見られることが多い。

また、一層多湿な沢沿いの崩壊地には樹木が育たず、草本群落が発達している。和田川の上流では、オオヨモギ・オオイタドリ・アカソ・ヒメシラスゲを代表とする植生が見られる。この群落には、エゾアジサイ・モミジカサ・オニシモツケ・ウワバミソウ・ホウチャクソウ・ヤマジノホトトギス・フキ・タニウツギ・ヒヨドリバナ・ハンゴンソウ・ヒヨドリバナウド・イヌコリヤナギ・キツリフネ・クサソテツ・ゼンマイ・ニヨイスミレ・ゴマナ・サワアザミ・ヤマニガナ・ホドイモ・オオバキスミレ・タニタデ・ヤマブドウなどの植物も見られる。中には山菜の種が数種も含まれている。(ウワバミソウ||ミズ)

一方、森林が破壊された後も継続的に火入等がおこなわれた乾性地には、ススキ・オカトラノオ・アキノキリンソウを主にしたススキ群落が発達しており、山麓の人家に近いところで見かける日本の景観である。ここには、里の帰化植物も侵入し、ワラビ・クズ・トコロ・アレチマツヨイグサ(帰化植物)・ヒルガオ・オオヨモギなどもある。

また、伐採地の林縁や道路沿いの樹木へおおいかぶさるように、マント植物のクズ群落が発達していて景観を特徴づけている。

三 ローム地帯と沖積低地帯の植生（市街地を含む人里植物）

(一) ローム地帯の植生（洪積台地）

台地の平坦部は、畑と採草地及び放牧場に利用されている面積が広く、林地は、採草地の周囲（例 奥羽種畜牧場）に防風林として、アカマツ・カラマツ・スギが植栽されているほかは、農地の周辺、或は宅地の周囲のいわゆる屋敷林として植えられているスギ・ケヤキ・アカマツなどや、台地から沖積低地に下降する傾斜地、或は土砂等の流出した崩壊地に残存するクリーコナラ二次林。ニセアカシア林などと、寺社・城跡の周囲に古人によって植えられた樹木等からなっている。これらの林内には、日照、湿度、地形、土質、林齢、樹種などの環境要因の違いによって、色々な植物が侵入している。また、畑の周辺や道端などの日当りの良いところには、いわゆる「ヤブ」が形成されて、ノイバラ・ヤブカンゾウ・キンミズヒキなどが混生する。一方、前記の道端やブルドーザーなどによって裸地になったところには、帰化植物のアレチマツヨイグサ・オオマツヨイグサ・セイヨウタンポポなどが群落をつくり、人里植物は複雑で変化に富んでいる。次にその主なものを記述しておく。

クリーコナラ二次林

土地利用度の低い崖や急傾斜地、寺社の周囲は、比較的破壊から免れることが多いので自然林として残っている場合がある。いわゆる「雑木林」という呼称で親しまれているもので、放置しておくとも長い間には元の植生ブナ林に戻っていく。よくいわれる関東の武蔵野の二次林、コナラークヌギ雑木林の冷温帯型なのである。この林は、落葉広葉樹によって構成されているので、春早い頃には陽光が地面にふりそそぎ、林内にはカタクリ・フク

ジュソウ・エンレイソウなどが咲き乱れ、美しい色どりを見せてくれる。次にこの林の主な構成種を掲げておく。

高木層 ミズナラ・コナラ・クリ・ホウノキ・トチ・ウワミズサクラ・ミズキ

亜高木層 ハウチワカエデ・キタコブシ・ヤマグワ・ヤマボウシ・ハクウンボク

低木層 オオバクロモジ・エゾアジサイ・ツノハシバミ・イヌツゲ・エゾユズリハ・ハイイヌガヤ・ミズ

キ・ガマズミ・ムシカリ

草本層 マイヅルソウ・オシダ・エンレイソウ・アキシバ・チゴザサ

(註 この二次林のタイプは、八幡岳に近いほど組成が顕著になる。)

なお、この林縁や伐採地には、好んでつる性のマント植物であるフジ・ツタウルシ・ミツバアケビ・ノブドウ・ヤマブドウなどが見られ、春から初夏にかけては、キタコブシ(田打桜)やホウノキが白い花を咲かせ、マンサクの黄色い花も見られる。また、オオヤマザクラ(七戸地方の山桜の主体)・カスミザクラ・ウワミズザクラなどが咲き競うのもこのタイプの山林である。また、林内では前出のフクジュソウやカタクリの花、十和田市付近の雪の少ない林縁地には、サクラソウも散見される。

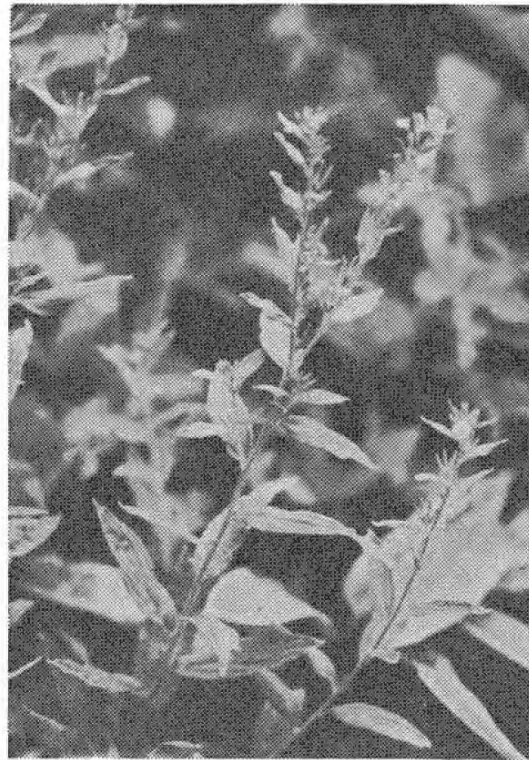
このほか、山菜の王といわれるタラも、このような二次林が伐採された跡に生える。夏季には、万葉の歌にも見られるオケラ・ノハナシヨウブ(本来は湿原性の植物で、ハナシヨウブ類の原種)・オオバギボウシ(ウレイと呼称している)・ヤマアジサイ、人目に余りつかない花が終った常緑の小型草本のシュンラン・エビネ、晩夏

から秋にかけては、ツルウメモドキ・マユミなどの赤い実、カエデ類のヤマウルシ・ヌルデなどの葉が色づき、二次林かいわいは四季折々の変化をもつて、われわれの目を楽しませてくれる。

ススキ草原

この種の草原は、ブナーミズナクラスの森林を破壊し、火入れをくり返しておけば形成される。ススキ草原は、放牧などや牛馬の食糧になって、次第にシバ草原に変わっていく。シバ草原も過度な踏みつけが続けば、オオバコ群落が出現する。田代平や種差海岸などはこうして形成され、現在では牛馬に変わって人が踏みつけることによって、維持されている草原なのである。したがって放牧地でも、田代平などでも過度な踏みつけがおこなわれる水飲み場や牛馬・人の集まるところは、踏みつけにもっとも強いオオバコを中心にした群落に変わって失っているのである。

平安期以降、この地方は馬の放牧によるシバ草原やススキ草原が形成され、樹木が生えないように絶えず火入れがおこなわれたのであるが、牧草の普及による草地改良と明治以降まで続いたといわれる焼畑農業から、本格的な施肥栽培農業へ移るとともに、草原は急激に減少し、残存地域も放牧されないため、ススキ草原から徐々にアカマツ林を経て、雑木林に変わりつつある。今、ススキ草原からシバ草原を経て、雑木林へととったこの地方の平野植生を人とかかわりあいを通じて巨視的に展望したのであるが、いずれにしても、人里植物は、その地域の歴史の中でつくられた人工の植物である。前項で述べた、武蔵野の雑木林（国木田独歩が愛したという）も元をただせば、中世頃まではススキ草原が発達していたのが（馬の放牧による）江戸時代には、江戸の台所を支



草原に咲く幻の花ムラサキ

などが錯綜している。次に、ススキ・シバ群落に随伴する種を記述しておく。

ススキ・シバスゲ・オキナグサ・ヒカゲスゲ・ミツバツチグリ・ニガナ・アリノトウグサ・オカトラノオ・チコグサ・オオバコ・スズメノヤリ・スズメノヒエ・ネジバナ・シロツメクサ・ウメバチソウ・ワラビ・ヤマハギ・キキヨウ・オミナエシ

路傍・あき地の植物

絶えず人や車に踏まれる路上には、広くオオバコ群落が発達している。このような場所には、ハイミチャナギ・スズメノカタビラ・イヌガラシ・カゼクサ・シロツメクサ・ニワヤナギなどのほかに、キンミズヒキ・スズメノヒエ・セイヨウタンポポ・オオアワガエリ・ノチドメなどが随伴して出現することが多い。

える薪炭林として生れ変わり（草原を放置すると雑木林に遷移する）、農業経営に組みこまれた経済林となって、自然と人間の営為との間に一定の調和が保たれてきたのである。しかし、薪炭も必要とされなくなった今日、開発されて一部に残存しているだけである。

さて、七戸町を概観する場合、前述したような経過をたどった雑木林や逆に雑木林が伐採され、ススキ群落に戻ったところや畑が放置されて、ススキ群落が発達したところ



シバ草原に咲くオキナグサ

近年とくに目立つのはタンポポで、市街地や近郊農村にも在来種のエゾタンポポは見られず、目につく殆んどが西洋タンポポに置き変っている。今一つは、帰化植物であるオオマツヨイグサが、花の小型なアレチマツヨイグサに次第に場所を占拠されていることである。

また、あき地などを何年か放置しておく、エノコログサ・イヌビエ・メヒシバ・カタバミ・スギナ・ギンギシ・ヒメスイバ・ヘラオオバコ・ジシバリ・ヒメジョオン・ヒメムカシヨモギ・アレチマツヨイグサ・ハコベなどが生える。これらは畑の雑草に共通するものも多く、その半数近くが帰化植物によって占められている。なお、大型草本で夏に黄色の花が咲く帰化植物（ブタの飼料用として日本に輸入されて野生化した）のキクイモや同じ路傍で、牧草地から出て野生化したオオアワガエリ（チモシー）・カモガヤ（オーチャードグラス）・コヌカグサ（レッドトップ）なども見られる。

(二) 沖積低地の植生（河川流域）

和田川・作田川・倉岡川・七戸川の各流域の沖積低地は、水田に利用されているところが多い。その中で、沢の入り込んでいる未利用地や水田灌漑用としてつくった溜池があちこちにあり、その上流や周囲に湿原が発達している。部分的で規模は小さいが、湧水付近は水温が低いので、ミズゴケが堆積して泥炭が形成されているとこ

ろもあり、寒冷地や八甲田山などでなければ見られない植生も発達している。こうした湿原の周囲には、ヤチハ
 ノキ林やヤチダモ・イヌコリヤナギ・オオバヤナギ・タチヤナギなどが繁り、ヨシ・クサレダマ・タチアザミ
 ・アゼスゲ・ナガボノワレモコウ・チゴザサ・カサスゲ・ヒライカモノハシ・オグルマ・ウキヤガラなどが草本
 群落を構成している。周囲の林床には、エンコウソウ・ミズバシヨウ・ザゼンソウ・ヒメザゼンソウなどや、
 散発的に泥炭地性のニッコウキスゲ・クロバナロウゲ・ミツガシワ・カキツバタ・タチギボウシが出現する。ま
 た、河川流域全般にわたって認められる種として、ミソハギ・ノハシヨウブ・ミズオトギリ・シロネ・サワオ
 グルマ・コオニユリ・サワヒヨドリ・イ・ヤブカンゾウ・ガマ・ヨシ・マコモ・セリ・オランダガラシ（ミズタ
 カナと呼称）などがあげられよう。また、未確認であるが、小河川や溜池等には、水草のヒルムシロ・ヒツジグ
 サ・コウホネ・ヒシ・クロモ・セキシヨウモ・ミクリ・ジュンサイ・ホサギキノフサモ・タヌキモ（食虫植物）
 などが生息するものと思われる。

なお、県内では津軽地方に余り見かけない帰化植物（北アメリカ原産）のオオハンゴンソウが、国道4号線沿
 いの湿地などで大群落を形成している。関西のオオアワダチソウとならんで、戦後急激に生息範囲を拡大してい
 るものである。この植物は、県南地方でも七戸町を中心に多いキク科の大型草本で、夏に黄色いキクイモと似た
 大型の花をつける。明治初期に牧草の種子に混入して北海道に入ったのが南下したものとされているが、七戸
 町を中心に繁殖を拡大しているのは、奥羽種畜牧場が窓口になっていることも十分考えられる。

(三) 七戸町の古木・名木類

七戸町には歴史の古い、名所・旧跡があるので、それにちなんだ古木類が見られる。以下に主なものについて記述しておく。

銀南木の子安イチョウ

イチョウは、中国が原産で日本にいつごろ渡来したかは不明であるが、寺院の境内、とくに観音堂のあるところに老樹が見られるところから、観音像の渡来とともに僧侶によってもちこまれたのではないかと考えられている。

イチョウは雌雄異株、精子で受精、実は雌株だけに形成（ぎんなん）される。老樹になると気根が下垂し、乳房の形態になることから、古来、子安の木として崇拜されることがある。

銀南木部落のイチョウは、樹高が二六メートル、日通り周囲一一・五メートル、樹齢約七五〇年といわれ、県内有数の巨木として、青森県天然記念物に指定されている。

この大イチョウは、約七五〇年前臨濟宗の名僧、法身禅師が倉岡に草庵を開いた際の手植えの木といわれる。

七戸城跡のモミとスギ他

モミの自然分布は、岩手・秋田県以南であり、樹景が美しいので神社・公園などに植栽されることが多い。五〇年位経過すると成長が早くなり、一〇〇年〜一五〇年で枯死するのが多いといわれ、巨木になる樹種としては短命な方である。一方、杉の自然分布は本県の津軽側に限定され、鱒ヶ沢町付近が北限とされている。モミとは逆に寿命が長く巨木になるので、神社仏閣等に古くから植えられ、日本建築の用材に利用されてきた。

七戸城跡のモミとスギは、二本並んで植えられており、その間は七メートル弱であり、二本同時か、余り時間的差のない状態で植えられたもののようなのである。モミは、樹高四五・四メートルで、日通り周囲五・六メートル、推定樹齢四〇〇年とされている。スギは、樹高三六メートル、日通り周囲が六メートル、推定樹齢が不詳（青森県環境保健部自然保護課『青森県の古木』昭和五五年三月）となっているが、この二種が同時に植えられたことや、山屋の薬師堂のスギ、或は、県内各地のモミ・スギを検討してみれば、樹齢は六〇〇年を降らないものと推定される。

このモミとスギは、青森県環境指標植物になっている。城跡にはこのほかに、クリ・ケヤキ・アカマツ等も見られるが、モミ・スギよりも樹齢が若く、近世になって植栽されたもののようなのである。

薬師堂のスギ

山屋の薬師堂は、七戸の西約四キロメートルの地にある。鳥居左側の案内板後のスギがもっとも大きく日通り周囲が六・六メートル、御堂左側のスギが、日通り周囲四・八メートルであった（昭和五六年一月調）。これに次いで、約四メートルを降らないと推定される巨木が、御堂後方に六本見られる。

これらのスギは、周囲の長さや樹高がいくらかづつことなるが、樹間から推定して、同時代に植えたもののようにであり、御堂左側のスギが鳥居左側のものより小柄なのは、密植のためと思われる。したがって、薬師堂のスギは七戸城跡のスギよりも古く、御堂に仏像が安置された年代の、八〇〇年位を経過しているものと推定される。

奥羽種畜牧場の並木林

明治二九年に、奥羽種馬牧場開設以後防風雪と風致林を兼ねる目的で植えられたと思うが、数十年を経過した今日、これらの並木は大きく成長して、区画毎にその周囲をかこうように各種の樹木が並んでいる。樹種は、アカマツ・カラマツ・ソメイヨシノが主で、その風致は捨てがたいものである。

(四) キノコ

青森県に産するキノコは、百数十種類といわれる。七戸町は、八幡岳のブナ林とその下部にミズナラ林を有しているほかに、雑木林やアカマツ林などがあるので、県内に見られる殆んどの種類が産するものと思われる。

キノコの発生は、気温と雨量に関係深く、とくに夏の雨量によって秋のキノコの豊凶がわかるといふ。一般に八、九月の降雨量が一〇〇〜一四〇ミリメートルで、降雨日数が七日前後のときは豊作型で、八月の降雨量が五〇ミリメートル以下になれば、不作型と考えてよいようである。

キノコには、それぞれ寄生生木や地上の腐植質に好みがあることは、承知のことである。

八幡岳の中腹以上のブナ・オオバクロモジ林内の切株・風倒木・放牧場周囲の草地造成のために寄せられたブナの根株等には、クリタケ・ナメコ・ムキタケ・ツキヨダケ(有毒)・ナラタケ・ブナハリタケ・シロタモギタケ・ホウキタケなどが生える。また、山麓付近のミズナラ・クリコナラ林には、シロシメジ・シャカシメジ・クリタケ・マイタケ・エノキタケ・ヤマドリ・ホウキタケ・ハイトリシメジ・タマゴダケ・ヒラタケ・ナラタケなどが見られる。このような林で、アカマツが混生するところには、ホンシメジ・ヌメリササタケ・ムラサキシ

メジ・サクラシメジなどのシメジ類が出現する。

一方、里に下ってマツ林に入ると、イグチ・クギタケ・オオギタケ・カワリハツ・ハツタケ・ツチカブリ・ドクベニタケ・バカマツタケ・アンズタケなどがある。そのほか、スギ林には種類が少ないとは言え、ニカワハリタケ・ニガクリタケ（猛毒）・スギヒラタケ・サツマモドキ類があり、カラマツ林には、ハナイグチ・チチタケ・ヌメリイグチ・ヘラタケなどが生えている。

次に、七戸地方で普通食用に供しているもののうち、代表的な種類の方言等について触れてみたい。先のブナ―オオバクロモジ林内に生えるキノコのうち、一般的で大量に収穫できるのはナラタケである。このキノコハ保存用にも優れているので、マツタケやマイタケがキノコの貴族階級とするならば、ナラタケは庶民階級のその他大勢にあたり、カックイとかハバギダケなどと愛称をつけられて親しまれている。

カックイと同じ頃カックイと並んで見られ、やはり庶民派の多少クセのあるブナハリタケは、カヌガと呼ばれており、ムキタケはハドコロと言って愛されている。このムキタケは猛毒のツキヨタケと似ているので、気をつけなければならない。区別点は、ムキタケの芯に黒いシミがないことである。クリタケはクリカックイなどと称されており、ミズナラーコナラークリの二次林（雑木林）に多い。ヒラタケはワガオイと呼ばれているが、近年人工栽培によって、市場に出まわっているのと同じものである。この林中には、キノコの王様と言われるマイタケが、ミズナラなどに生えているほか、やはり、マイタケのように大きいサルノコシカケ科のマスタータケがある。マスタータケ・マイタケやおなじみのナメコなどについては、方言としての愛称が余り聞かれない。シメジ類につい

ては、ホンシメジをクロハ、シロシメジをシロハ、ムラサキシメジやキシメジのことをギンタケと称するのが普通である。ヤナギ・ニセアカシヤなどに生えるエノキダケは、降雪期に入って見られることがあるので、ユキノシタとも言われている。

アカマツ林内では、八月に生えるカワリハツというキノコがあり、ドヨウハツタケ（土用）と呼んでいる。これらと同じ季節に見られるクギタケは、トジモダシという。

次に毒キノコの代表的なものを記述しておく。

ツキヨタケ

ブナの枯死木に生え、ムキタケ（ハドコロ）と間違ふことあり。区別は、ツキヨタケには二つに割ると基部に黒い一センチメートル位の斑紋がある。中毒例のもっとも多いキノコである。

ニガクリタケ

スギ・ナラ・ミズナラ等の枯死木に生え、クリタケと間違ふことあり。区別は、クリタケは褐色が濃くヌメリがある。死亡することあり。

その他に、ベニテングダケ・テングダケ・シロタマゴテングダケなどの種類やホウキダケの仲間、黄褐色を呈しているキホウキダケなどが一般的な有毒キノコとされている。なお、マツ林や雑木林内に生えるドクベニタケ（赤色）という目立つキノコがあり、一般に毒キノコと思われるけれども食用になる。

第三節 動物

動物の種類とその生態的傾向は、植生環境とのからみ合いで位置づけられる。七戸町の動物生息傾向は複雑で巨視的にいうならば、山地性の種から低地性の種まで混生しているのが特徴である。次に、哺乳類・鳥類・は虫類・両生類・魚類・昆虫類・その他の順で記述する。

一 哺乳類

大型哺乳類では、ニホンカモシカ・ツキノワグマ・ホンドキツネ・ホンドタヌキが生息する。このうち、ニホンカモシカは日本固有種で特別記念物・国際保護獣に指定されているので、近年増殖の傾向にあると言われてい
る。カモシカは、八幡岳や西野などの山地に生息するのが、時折山麓の民家近くまで出現するというから、少なくとも八甲田東部一帯から八幡岳にかけても同じ傾向にあるだろう。

ツキノワグマは、最近に至って七戸町に出現した情報はないが、八甲田山塊の赤倉岳等に生息するのが十和田湖町立石などに出現して、トウモロコシ畑を荒していることなどから考えると、八幡岳付近が生息場所ではなくても秋期などは十分に移動出没の可能性があるだろう。クマはカモシカほどではないが、増加傾向にあるといわれているので記載した。タヌキとキツネは七戸地方では増加の傾向にあると言われている。その原因は、ハンター



八幡岳の山林内で生息する
ニホンカモシカ

の狩猟対象にならないこと、造林地が多くなり、被食動物が増えたこと、休猟区の設定によって、キジ・ヤマドリ・ノウサギなどが増殖したためと考えられている。

中小型の哺乳類では、ニホンアナグマ・ホンドイタチ・ホンドテン・トウホクノウサギ・ニッコウムササビ・ニホンリス・ホンシユウモモンガ・ヤマネなどやホンドアカネズミ・ホンドヒメネズミ・ホンドハタネズミ・トウホクヤチネズミ、人家付近で見るニホンクマネズミ・

ニホンドブネズミ・ハツカネズミ、モグラに近いトガリネズミ科のホンシユウトガリネズミ・ホンシユウカワネズミ・ホンシユウジネズミなどが生息する。また、モグラ類では、アズマモグラの基亜種といわれるコモグラ・ホンシユウヒミズがおり、コウモリ類の確かな報告はないが、上北鉦山の松林で生息するニホンテングコウモリや、十和田市で記録されているニホンコテングコウモリのほかに、県内の森林地帯に広く分布するといわれているニホンウサギコウモリなどの生息が推定される。

以上述べた中で、アナグマは減少傾向に、イタチは増加の傾向にあるという。トウホクノウサギは、七戸地方に生息する山ウサギのことで、白化するものとしめないものがあって、別種のように思われているが同種である。このウサギは、八幡岳山頂から市街地付近の山林まで広範にわたって生息する。ムササビは、八幡岳のブナ林中

に生息し、時々滑空するのを見かけるが、伐採がおこなわれているので、減少の傾向にある動物である。

ニホンリスは、本来森林性の動物であるが、順応性が強く、マツ植林地や市街地の屋敷林にまであらわれる。この地方では、ニホンリスのことをキネズミと呼んでいる。

ヤマネやモモンガは、八幡岳に生息するといわれているが、この動物は全体的に激減しているので、その生息数は極めて少ないものと思われる。

ネズミの仲間には、山岳地帯の森林性のもの、人里付近で田畑に多く生息するもの、家屋などに侵入するものなど生態的行動範囲が極めて広い。ホンドアカネズミは、森林性のネズミで低山の森林では最優占種になるので、八幡岳から山麓一帯にかけて広く生息するものと思われる。ホンドヒメネズミは、アカネズミより高い山地（亜高山帯か高山帯Ⅱ八甲田山）に生息域をもつのが一般的であるが、低所にも見られる。ヒメネズミは、種子類を食用とするので、アカネズミなどのように樹木には被害を加えることはないようである。ハタネズミは、体が小柄でズングリしており、草原・畑等に巣をつくる。ドブネズミは、下水などに巣をつくり、この二種は、人家にも入り、天上裏などでナワ張り争いのたたかいが見られる。ハタネズミは、草原や畑の低所における最優占種である。

二 鳥 類

八幡岳のブナ林やミズナラ林及び山頂付近に生息している鳥類は、ワシ・タカの仲間では、イヌワシ・クマタ



里の林地に生息するノスリ

カ・ハイタカ・ツミ・ノスリ・ハヤブサ（ハヤブサ科）・チュウヒ・ケアシノスリ・トビがあげられる。イヌワシは、八甲田山でも営巣地は確認されていないが、八幡岳の頂上付近にも飛来することがある。クマタカは、タカ類では最大、古来鷹狩りに使用されてきたもので、八幡岳のどこかで繁殖している可能性が高い。また、ハイタカは、ハト位の大きさと並んで小動物の鷹狩りに使われてきたもので、冬期には人家近くにも降りてくる。ノスリやハヤブサは山麓から人家近くに生息して、主にネズミ類を捕食している。ノスリは留鳥で、トビなどと市街地上空を飛んでいるのをよく見かける。

ノスリはもつとも一般的なタカで、上北地方ではウマノクソタカとも呼んでいる。ケアシノスリは三沢市などでも確認されているから、山岳地をもつ当地では生息間違いないものと思われる。この鳥は北方系で、冬期に本州北部に限って飛来するといわれている。また、山麓地帯にかけて、ヨタカ（ヨタカ科）が地上に営巣しているのを見かける。夜間になると、キョッキョッキョと鳴くので知られている鳥である。

フクロウの仲間では、フクロウ・コミミズク・オオコノハズク・トラフズク・コノハズクが生息する。これらの種類は、クマタカのように山岳に生息域が限定されず、人里に降りることが多い。冬期にその傾向が強く、オオコノハズクなどは厳寒期になると人家に入ってくることもある。コノハズクは、ブッパンブッパンと鳴く鳥で、田代平で鳴き声を聞いたことがあり、八幡岳にも生息するものと思われるので、記録しておいた。

ハトの仲間では、キジバト・アオバト、ホトトギスの仲間には、カッコウ・ホトトギス・ツツドリなどが生息している。キジバトはヤマバトといい、深山よりも植林地や畑の付近に多い留鳥で、畑作物に被害をあたえることがある。アオバトは、ブナ・ナラ広葉林内に生息する夏鳥で、夜になると連続的に長時間にわたって、ワーオワーオと淋しげに鳴く。

この鳥をマオー鳥といっているのは、鳴き声の異様なことからつけられたものと考えられる。

カッコウは低地でも普通だが、ホトトギスは山地でないと余り鳴き声が聞かれなくなった。ツツドリは、カッコウやホトトギスに比較して鳴き声が低く、個体数も少ないので目立たない。キジ類では、キジ・ヤマドリ・ウズラがあり、キジは低地の植林地や畑地に生息域をもち、ヤマドリは山地に多いので生息域を異にする。ウズラは夏鳥で、草原に多いが最近では牧草地に繁殖する傾向があり、八幡岳中腹の牧草や低地の牧草地でウズラ独得の鳴き声が聞かれる。

カラスの仲間にかケス、キツツキの類にはアカゲラ・アオゲラ、ツバメの仲間では、イワツバメ・ハリオアマツバメ・アマツバメが八幡岳を含む東部八甲田全域を群翔するのが観察されている。本来は山岳地にいるイワツバメやハリオアマツバメも低地の人家に営巣する傾向が目立っている。

倉岡川・作田川・和田川などの上流の溪流などには、ヤマセミ・アカシヨウビン・カワセミが生息している。ヤマセミは森林性の大型カワセミで、近年減少傾向にある貴重種である。アカシヨウビンは赤褐色をした美しい鳥で、やはりその数は少ない。カワセミは七戸町の人家に近い溜池や河川でも生息している。

以上のほか、ミソサザイ・サンコウチョウ・セグロセキレイ・キセキレイ・ハクセキレイ・ヒレンジャク・キレンジャク・モズ・アカモズ・ノビタキ・トラツグミ・クロツグミ・アカハラ・ツグミ・コガラ・ヒガラ・イカル・ウソ・イスカなどやカラスの二種、ハシブトガラスとハシボソガラスが生息している。これらの種は、山地に生息するとともに、草地や畑にも出現するので人の目につく種類が多い。

一方、七戸の市街地付近で見られる種は、キセキレイ・ハクセキレイ（以上チンチンと称す）・ヒヨドリ・ハシボソガラス・ハシブトガラス・トビ・キジ・ムクドリ・コムクドリ・シジュウカラ・メジロ・ホウジロ・アオジ・マヒワ・ハギマシコ・カケス・キジバト・スズメ・ニュウナイスズメ（秋期）・モズ・アマツバメ・イワツバメ・カッコウなどが一般的であろう。

また、草地や湿原のヨシ原等では、ヨシキリ・コヨシキリ・ホホアカ・コジュリンのほか、田植えの頃、天空から急降下音をたてながら飛翔するオオジシギ、飛ぶ姿がジグザグなタンギや、溜池や和田川などの水辺には夏はカルガモ、冬はマガモ・カルガモ・コガモ・オンドリなどのカモ類と、クイナ（夏鳥）・バン（夏鳥）・カイツブリ（夏鳥）、時々アオサギ・コサギ・ケリなども見られる。七戸町の鳥類の傾向を一言でいうと、山地性の鳥類は豊かであるが、湖沼がないので、ガン・カモ類などの水鳥が少ないのが特徴であろう。

三 は虫類・両生類

は虫類には、へびの種類が問われるが資料がないので、上北地方で確認されているものについて記述すること

どめておく。ヤマカガシ・シマヘビ・アオダイショウ・ジムグリ、マムシ科ではマムシが生息していると思われる。主にネズミやカエルを捕食するヤマカガシは、緑褐色か暗褐色の地に黒い斑紋がある。この地方で、カラスヘビと称されているヘビもあるが、ヤマカガシの黒化型と推定されている。

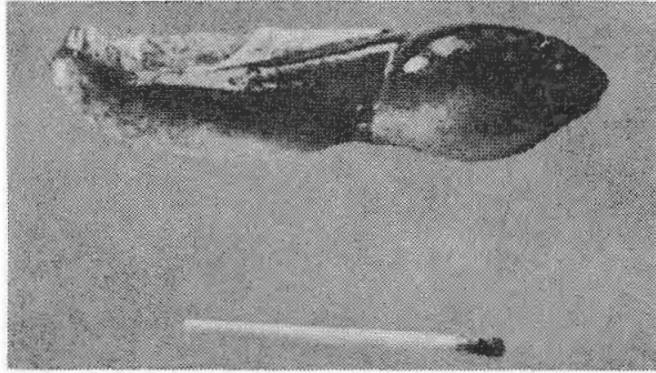
シマヘビは、茶褐色で背中に黒くて太い縞模様がある。マムシに似て小柄であり、人にかかってくることもあるが無毒であり危険性はない。アオダイショウは大型で色は緑赤褐色で人に合うと逃げ出す。マムシは胎性で、先のヘビ科とは異なり危険であるが、七戸町では、下北の尻屋付近の桑畑山や八甲田山の石倉岳のような集団生息地は知られていない。

その他の虫類には、トカゲ科のトカゲ、カナヘビ科のカナヘビがいる。トカゲは夏に日当りのよい山の斜面などにおり、カナヘビはトカゲと間違われることが多い。カナヘビは頭のウロコが左右対象で大きく、トカゲは小さいので区別ができる。トカゲは、敵に襲われると尾を切って逃げる。これを自切と言うが、しばらくすると再生する。また、動作が機敏で、昆虫等の捕食がたくみである。

両生類は、陸上と水中の両方の生活史をもっているもので、このように呼称されている。イモリやカエル・サンショウウオがこの仲間である。両生類についても、七戸町からの報告等が少なく、山屋向かいの姥子石神社付近からのトウホクサンショウウオの生息記録位のものであり、更にくわしく調査する必要がある。

以下に、八甲田東部の山地と上北地方で普通に見られる種を列記しておく。

ヒキガエル(ヒキガエル科)・ヤマアカガエル(アカガエル科)・トノサマガエル(アカガエル科)・ツチガ



最大のカエル、ウシガエルのオタマジャクシ

エル（アカガエル科）・アマガエル（アマガエル科）・カジカガエル（アオガエル科）・ウシガエル（アカガエル科）。

この中で、ヒキガエルはガマと称されるもので一般的に知られており、我々になじみ深いし、庭先に出てくることもある。ヤマアカガエルは山地性のカエルで、この付近の山林では普通に見られる。

トノサマガエル・ツチガエルは、水田や小川の中で初夏の夜に鳴きわめき、水かきのついた足が発達し、泳ぎがうまいカエルである。アマガエルは緑色で手足に吸盤があり、樹上で生活している小柄な種類で、雨が近づくと鳴き出して雨を知らせる。

カジカガエルは清流に生息するが、その生息場所は県内でも限られている。このカエルは七戸川に生息しており、トウホクサンショウウオとならんで分布上貴重である。

ウシガエルは、カエル中最大で帰化動物の一種であり、最近になって方々の養殖池で繁殖している。仔牛のような鳴き声なので、ウシガエルとよんでいる食用ガエルである。このほかに、シュレーゲルアオガエルやモリアオガエルが生息するものと思われる。モリアオガエルは樹や池の端の草むらに、シュレーゲルアオガエルは稲わらの下などに、同様な白いアワ状の卵を生む。両種は近縁の種類で、三沢・十和田市や野辺地町・八甲田山中などにも生息しているので、七戸町の生息は確実に

あろう。

有尾類では、トウホクサンショウウオが山屋向かいの姥子石神社付近に生息し、クロサンショウウオは確認されていないが、生息の可能性が強い。イモリはアカハラと称しているが、溜池や小川などに普通に見られる。

四 円口類・魚類・甲かく類等

円口類や魚類・甲かく類は、和田川・作田川・倉岡川・七戸川などや沖積低地帯に分布する大小の溜池に生息する。これらの水生動物は、淡水に普通に見られる種であるが、一生淡水で過ごすものと、生活史のある時期を海で過ごす降海型とに区別される。

円口類には、スナヤツメとカワヤツメがある。スナヤツメは水の澄んだ小河川の砂泥にすみ、食性は植物食で海に降ることはない小型のヤツメである。カワヤツメは、海と川を往復する回遊魚で、体型はウナギのように大きい。動物食で、他の魚に吸盤で吸いつき、歯でカミ殺してから液状にして吸収する。カワヤツメは、七戸川やその上流や和田川などに生息する。食用にするのは主にカワヤツメの方であり、ビタミンAを含んでいるので目によいといわれる。

魚類では、ウナギが七戸川等に太平洋から小川原湖を経てそ上するが、その数は少ない。

ドジョウ類では、ドジョウ一種と思われるが、隣接の十和田市にはシマドジョウが生息するといわれているから、調査で明らかにする必要がある。ドジョウは鰓で呼吸するほか腸でも呼吸する。

サケ科の魚類には、サケやマスとヤマメ・イワナがある。サケは、相坂川のように大量に見られないが、時折小川原湖を経て七戸川にそ上するという。マスとヤマメは同一種類で、ヤマメの雄は河川の上流で一生を過ごし、雌は生後一年位経過すると海へ降り、サクラマスになるといふ。サクラマス（ホンマス）は産卵すると死んでしまうが、ヤマメは数年生きる。和田川・作田川・倉岡川の上流にはヤマメが生息するが、水温が真夏でも二〇度以下のところに限られる。ヤマメの上流に生息するのがイワナで、水温が一五度以下の水域に生息する。一生この水域で過ごし、海に降ることはない。本県のイワナは、エゾイワナの方が多いいい。サケ科の魚類で、大正・昭和初期までは、イトウ（大型魚）も七戸川で見られたという。

このほかに、キュウリョウ科のアユもあり、コイの仲間のウグイには、ウグイ・マルタウグイ・エゾウグイがある。ウグイは一般にハヤといわれ、三種が七戸川などに生息する。この三種には降海型と淡水型があつて、マルタウグイ・ウグイ・エゾウグイの順に降海型の性質が強いという。これらと別種かどうかで問題となるシラハエという魚が、七戸川に生息する。この魚は、北海道型のエゾウグイではないかと考えられている。また、コイ科にはコイ・ゲンゴロウブナ・マブナ（ギンブナ）・ヤリタナゴなどがある。

ゲンゴロウブナは一般に、ヘラブナと呼ばれており、小川原湖などで放流したものが増殖したものである。マブナは、この地方の在来種で食性も違ふ。ヘラブナは動物食で、ギンブナは雑食性である。ヤリタナゴは、単にタナゴと称している種類で池沼に普通に生息しているが、このタナゴには変つた習性が見られる。カラスガイの中に産卵し、カラスガイの中で稚魚が育ち、稚魚がある程度成長すると、今度はカラスガイの卵が、タナゴの仔

について移動して分布を広げる相互扶助の習性がある。

トゲウオの仲間には、トミヨ・イトヨがあり、イトヨは降海型も淡水型もあるという。トミヨは淡水型である。どちらも営巣して子を育てる。このほかに、ナマズ・メダカやハゼ科の仲間では、ゴリと言われるカワヨシノボリやハゼ、カジカ科ではカジカが生息している。

魚類のほかに、甲かく類では、池や川にヌマエビやヌカエビが水草の間などにいる。またカニの類では、支流の小河川も含めて、ハサミに毛が生えている降海型のモクズガニが生息している。このカニは、川のふちに穴を掘ってすみ繁殖期には海に降って産卵する。

また、山すその清水の湧きでるところには、サワガニが生息し、このカニを七戸地方でヨコガニと呼んでいる。また、ザリガニのことをサルガニともいう。この兩種とも、生息場所が局限されて絶滅の危機にある。とくに、ザリガニは近縁の帰化動物アメリカザリガニの攻勢がすさまじく、在来のザリガニの分布域がアメリカザリガニに置き変わりつつあり、ザリガニの保護が必要かと思われる。このアメリカザリガニは、上北町方面から七戸町に分布を拡大しつつあるといわれている。

軟体動物は、水陸両方にすみ、水中では腹足類のカワニナやモノアラガイとマルタニシ・オオタニシがある。二枚貝類では、ヌマガイやカラスガイなどが、溜池や河川に生息している。

陸上には、カタツムリとナメクジがあり、ともに腹足類で、カタツムリでは、オカモノアラガイやミスジマイマイ・ヒダリマキマイマイ・ウスカワマイマイなどが見られる。マイマイ類は雌雄同体の動物で、冬は土中に冬

眠している。

ナメクジ類には、コウラナメクジがおり、人家や庭などに多い。このほかに、ノハラナメクジや山に近い方に見られるノコウラナメクジなどが生息すると考えられる。八幡岳の山岳地帯には、別種の何種かが生息するものと推定されるが確実な資料がない。このほかに、ヒルの仲間では、ヌマビルやシマイシビル・チスイビルなどがあり、この中でもチスイビルは、その吸血性により、古くから医療用に利用されている。

五 昆虫類

昆虫の種類は、動物全体の七割を占めるといわれており、進化史上でもっとも分化したグループである。七戸町の昆虫相は、県内他地域と比較して余り差がないといわれているが、県南・下北地域の中間帯として、分布上中間点にあたっていることと、八幡岳のような山岳地帯をかかえているので、種類が多いと思われる。しかし、残念なことに、調査資料不足で不確かな部分が多いので、人目につきやすい一般的なものを記述しておく。

蝶

蝶は、卵・幼虫・蛹・成虫と完全変態をする。幼虫には食草があり、成虫（蝶）はその植物に産卵する。

アゲハの仲間は、形も大型で色彩も美しく、アゲハチョウ・キアゲハ・カラスアゲハ・ミヤマカラスアゲハなどがある。アゲハとキアゲハは、町内のどこでも見られる種類であり、アゲハはサンショウが食草である。キアゲハは、セリ科のセリ・ボウフウなどが食草で、何れも香りの強い植物が食草となっている。ミヤマカラスアゲ

ハ・カラスアゲハは山地に多く、キハダやサンショウを食草とする。

アゲハ類より一般的なモンシロチョウの仲間には、キャベツを食べるモンシロチョウがあり、この幼虫をアオムシと呼んでいる。

このほかに、白っぽいモンシロチョウより黒く、スジが太いスジグロチョウ、羽の先が橙々色をしたツマキチョウや黄色のモンキチョウなどが、畑地などで普通に見られる。

タテハ類では、ウスバシロチョウ・ヒヨウモンチョウ・キベリタテハ・ミドリヒヨウモン・ウラギンヒヨウモン・イチモンジチョウ・コムスジ・キタテハ・クジャクチョウ・アカタテハ・ヒメアカタテハなどがある。この仲間は中型の蝶で、山間にいるキベリタテハや、八甲田山・八幡岳の山頂から平地にまで広く分布するクジャクチョウなどや、白色地の稀産種、ウスバシロチョウが山間部に多い。ヒヨウモンチョウ類はスミレが食草として知られており、橙々色のものが多く、シバ原・ススキ草原などでよく見かける。

セセリチョウ類には、オオチャバネセセリ・ダイメヨウセセリ・イチモンジセセリ・キマダラセセリ・ギンイチモンジセセリ・コチャバネセセリなどがある。これらの蝶は、山地よりも畑地から雑木林へ移る道端などに生息するものが多い。余り移動力がなく、幼虫類は、エノコログサ・ヤマノイモ・ササ類などを食草としている蛾の仲間に近い蝶である。

黒褐色の地に目玉模様のあるのは、ジャノメチョウの仲間、ヒメウラナミジャノメ・ヒメジャノメ・クロヒカゲ・オオヒカゲなどが見られる。この蝶類は、ススキ・ササ・メヒシバなどを食草にしているので、成虫もサ

サヤブ等で見ることが多い。

以上のほかに、八甲田山東部の出代地区で見られる種に、ムモンアカシジミ・ウスイロオナガシジミ・ムモンジアカシジミ・ゴマシジミ・エゾミドリシジミ・キベリタテハ・ウスバシロチョウなどの山地性蝶がある。これらは、隣接の八幡岳にも生息するであろう。

トンボ・甲虫類・その他

トンボの仲間には、イトトンボ・カワトンボ・トンボ・ヤンマの類があり、イトトンボ類には、イトトンボのほか、オオイトトンボ・キイトトンボ・オツネトンボなどが一般的で、小川の淵などや水田に見られる。カワトンボの仲間では、ハグロトンボがある。これらのトンボは、羽化した場所から遠く離れることがない。大型のヤンマ類には、オニヤンマ・ギンヤンマ・ルリボシヤンマなどがおり、池のナワバリ内を一口中飛び回って、他の雄に侵入されないように巡視する姿をよく見かけるものである。そして、最も普通に見られるトンボは、アキアカネ・ナツアカネ・マユタテアカネ・ミヤマアカネ・ノシメトンボやショウジョウトンボなどであり、近年急激に減少傾向にあるといわれる種に、ハラビロトンボがある。サナエトンボの仲間には、ホンサナエやオナガサナエなどがある。トンボ類は、羽化すると間もなく水辺を離れたところへ移動し、そこで成熟するまで生活する。十分成熟した個体は、再び水辺へもどり産卵して一生を終るが、その代表的なものがアキアカネなどの渡りである。アキアカネは、羽化すると順に次々と山の方へ移っていくが、山から平地へ移動する際は、大群をなして一挙に渡ることが多い。

セミ類では、八幡岳のブナ林で春一番に鳴き出す中型のエゾハルゼミがある。

このセミは、北海道と東北地方に分布している。真夏になると、エゾゼミ・アブラゼミ・ヒグラシ・ニイニイゼミ・ミンミンゼミが鳴き出す。エゾゼミには、赤褐色がかったアカエゾゼミと、黒褐色をしたエゾゼミのほか、両者より小型で美しいコエゾゼミが八幡岳のブナ林に生息している。ニイニイゼミは、アブラゼミを小型にしたようである。夏が過ぎる頃になって鳴き出すのが、ツクツクホウシであるが、この数は少ない。

蛾の仲間には、夜行性で夜に飛び回るのが多く、光に集まっているのをよく見かけるが、昼は保護色を利用して樹木等に隠れている。

三角形の羽で飛び回るのがスズメガの類で、セシズズメ・ベニスズメなどがある。大型で蝶のような形をしているのがヤママユガの類で、ヤママユや水色の羽で蛾の中でもっとも美しいオオミズアオ、木に緑色のマユを垂れるウスタヒガ・クスサンなどがある。イボタガ類にはイボタガがある。この蛾は、幼虫がシャクトリムシとして知られている。シャクガ類には、アオシャクやヒメシャク・ナミシャク・エダシャクなどの種類が見られる。木の枝に堅いマユをつけるイガラヤ、保護色のすばらしいカレハガ・ヤガ・コウモリガ・ホリガなどの種類がある。ミノムシといわれているミノガ・オオミノガなども見られる。このほかに八幡岳のブナ林内には、多くの山地性種の蛾が生息しているものと思われる。

カブトムシ類は、コガネムシ科に属し、コナラ・ミズナラ・クリなどの樹液に集まるものが多い。カブトムシ・ヒメハナムグリ・シロテンハナムグリ・シラホシハナムグリや、美しい色のアカカナブンやカナブンなどは樹

液に集まり、ツヤコガネ・マメコガネ・ドウガネブイブイ・ナガチャコガネ・コガネムシなどは木や草を食す種類である。一方、哺乳類のとくに馬糞などに集まるダイコクコガネ・ツノコガネ・エンマコガネなども生息する。これらは、山麓の二次林地帯に多く見られる。

カブトムシとともに樹液に集まり、樹液の争奪戦をくり広げるクワガタムシの類には、大型種のノコギリクワガタのほか、コクワガタ・アカアシクワガタなども見られる。また、同じ樹液に集まるケンキスイの仲間には、ヨツボシケンキスイなどがある。

動物の死体にむらがるシデムシ科には、ヒラタヒデムシやクロヒデムシ、ミミズ類を捕食するオサムシ科には、アオオサムシ・クロナガオサムシがある。ゴミムシの仲間では、アオゴミムシ・オオクロナガゴミムシ・オナガゴミムシなどや、ハンミョウ科には、ハンミョウが生息している。カミキリムシ科では、ノコギリカミキリ・ウスバカミキリ・ゴマダラカミキリ・シロスジカミキリなどが樹木に集まり、花にはアオハナカミキリを見かける。

アリマキを食べるテントウムシの仲間では、カメノコテントウムシやナナホシテントウムシ、同科のニジュウヤホシテントウは、ジャガイモなどの害虫として農業上で良く知られている。

オトシブミ科のオトシブミは、樹木の葉を巻きこんでその中に産卵し、その後葉が地面に落下する変わった習性をもっている。ゾウムシの仲間には、米の害虫として誰でも知っているコクゾウムシや、オオゾウムシ・オオアオゾウムシなどがあり、ハムシ類では、真黒のヨモギハムシのほか、ルリ色をした美しいルリハムシなどが生

息している。

夏の風物詩として親しまれているホタル類は、本邦に約一五種生息しているが、その中でとくに発光が素晴らしい種として知られているのが、ヘイケボタルとゲンジボタルの二種とされている。両種は生息域が異なり、ヘイケボタルは水田のある小川などの汚水の中でも幼虫が育ち易いので、平野部の小川などを中心に生息する。一方、ゲンジボタルは、清流のある溪流付近を生息域にしている。したがって、水田や湿地で一般に見るホタルは、ヘイケボタルの方である。七戸地方の水田などで見るのは本種であるが、七戸川の上流などにはゲンジボタルも生息しているという。両種とも自然環境の良悪に敏感で、近年自然破壊が進行し、減少傾向にある。

水性の甲虫類では、他にガムシ類やミズスマシ類がある。ゲンゴロウの仲間には、ゲンゴロウのほか二種が生息している。ゲンゴロウは昼は水中で小型の水生動物を捕食し、夜になると飛び回り光に集まるので承知の種である。このほかに、ミズムシ類・マツモムシ類・タガメ類（ミズカマキリなど）や、アメンボ類（アメンボ・ヒメアメンボ）などが生息している。

幼虫が水中で生活するもので、トンボ類のほかにガガンボ類のマダラガガンボ・ミカドガガンボなどがある。

また、カの種類では、オオクロヤブカ・アカイエカ・ハマダラカなどや春に軒下などに群飛するユスリカがあり、当地方では、カ類を一般にヨガと称している。

カと並んで動物から血を吸う種には、アブ類がある。大型種では、アカウシアブ・ウシアブ・シロアブ・メクラアブ・クロアブ・キンイロアブなどが生息している。七戸町には放牧地が多いので、七、八月にはこれらのア

ブをよく見る。また、ハエの類には、人家に多いイエバエやキンバエのほか、クロイエバエ・ハナアブバエ・シマアブバエ・シヨウジョウバエなども生息している。

秋期に鳴く虫では、キリギリス類とコウロギ類がある。キリギリス科には、キリギリス・ウマオイムシ・ヤブキリ・ササキリなどがあり、コウロギ科では、エンマコウロギ・オカメコウロギ・カネタタキなどがある。また、同属のバッタ類には、ヒシバッタ・オンブバッタ・クルマバッタ・セグロバッタ・ダイメヨウバッタ・トノサマバッタ・ツチバッタなどがおり、イナゴ類には、イナゴ・ツチイナゴが生息する。なお、バッタに近縁の種には、カマドウマ類のカマドウマ・マダラカマドウマが、ケラ科にはケラ、カマキリ類にはオオカマキリのほか数種がある。

ハチの類は、種類によって形やマユの色が違う。ハチはアリと近縁で集団をつくり、分業の進んだ社会生活をするものと、個体生活をするものまで、各種の生態が見られる。個体生活をする種には、コマルハナバチ・クマバチなどの葉バチ類や、クロアナバチ・ベッコウバチなどのカリウドバチがある。前者は葉に営巣し、後者は昆虫を殺して、土中の巣に運び幼虫の食料にする特殊な習性がある。社会生活をするものには、ミツバチのほかにスズメバチ科のスズメバチ・キイロスズメバチ・クロスズメバチ・キアシナガバチなどがある。

アリ類は、すべて集団をつくり分業が発達している。最も普通なのは、クロヤマアリ・アカヤマアリで、エゾヤマアリやクロオオアリも生息している。枯木には、ヤマトシロアリなどの白アリもいる。また、これらと同じ生息域をもつアブラムシ類には、ワタアブラムシなどのように、アリと共生生活をするものがある。その他、ハ

サミムシ、最近ではゴキブリも見られる。

カイガラムシ類では、オオワラジカイガラムシやタケフクロカイガラムシなどが見られる。

六 その他の動物

昆虫類のほかの節足動物には、クモ・ダニ・ムカデなどの類が生息している。

クモ類は昆虫を捕食するが、その捕獲法に、クモの巣を張って捕える種と、地上を走り回って捕えるものとの二種類がある。一般的には、前者のような種をクモと思っていることが多い。コモリグモ・サラグモ・アシダカグモなどは、地上で昆虫を追い回して捕える。網を張る種にも、柵網を張るものと円網を張るものがある。前者には、小屋などで見えるイエタナグモや草原に住むクサグモなどがある。

一方、後者は人家の軒下などで普通に見るクモの巣がオニグモで、山林にはキバナオニグモ、草藪にはジョウロウグモ・コガネグモなどがある。巣をつくらないで、花に寄ってくる虫を捕えるハナグモや、ハエに忍び寄って捕えるハエグモなども生息する。ダニ類も多くの種類があり、牛馬等に寄生するほかに、草食性のダニも生息する。このほかに、ヤスデ・ムカデ・ゲジの類が生息している。

参考文献

- 青森県
『青森県自然環境保全基礎調査報告書』昭和五十一年
- 青森県道路公社
『みちのく有料道路建設予定地の植生』昭和五二年
- 三沢市
『三沢市の自然』昭和五四年
- 須藤智道
『八幡岳の植生・日本シダの会東北支部八戸グループ月報』昭和五六年
- 須藤智道
『七戸周辺の植物(1)・生物通信』昭和五十一年
- 須藤智道
『七戸周辺の植物(2)・生物通信』昭和五二年
- 青森県環境保健部自然保護課
『青森県の古木』昭和五五年
- 古川 博
『むつ小川原地域の鳥類リスト』昭和五六年
- 東奥日報社
『青森県動物誌』昭和四十三年
- 下田町
『下田町誌』昭和五四年
- 十和田市
『十和田市史』昭和五十一年